

【NTR支配】夫の上司に墮とされる強制絶頂【完全版】
サンプル（一部抜粋）

「奈々、そろそろ仕事に行くよ！」

今日は少し特別な朝。理由は夫の昇進が決まる日だから。

私と夫の祐也は約五年前に結婚した。優しくて穏やかで誠実。そんな祐也に出会えた事が、私の幸せだった。

一度も遅刻も欠勤もせず、仕事を頑張る祐也はようやく昇進が決まりそうだと言っていて、私はそんな彼を応援していた。

「多分今日、黒崎さんから正式に話があると思う。」

「黒崎さんって…たしか上司の？」

「そうそう。あの人、ちょっと怖いから…。緊張するけど…」

「祐也なら大丈夫！いつも頑張ってるの、知ってるよ。きっと大丈夫だよ。」
不安がる祐也に笑顔を向け、エールを送る。

「ありがとう、元気でた！」

帰り、ケーキでも買ってくるから。じゃ、行ってきます！」

ドアがガタンと閉まる。

きつと良い顔で帰ってくるんだろ。今日は祐也の好物を沢山作ってお祝いしなきゃ。

そんな未来を当たり前のように思い描いていた。

その裏で悪魔が私の日常を壊そうとしているなんて、想像する事もなく。

夫の好きなご飯を作ろうと下準備をしていた夕方、私のスマホが鳴った。画面を確認すると祐也からの電話で…私は慌てて手を洗って電話に出た。

「もしもし。」

「奈々…」

祐也の声が、なぜか暗く曇っていた。

「…どうかしたの？」

「うん…実はさ…仕事で大きなミスをやらかしてしまっ…」

「え…」

「昇進は一旦見合わせるって言われて、むしろ降格かクビになるかもしれない…」
想像もしていなかった告白に、私はどんな言葉を返せばいいか分からなかった。

「…そう…」

「それだけ、伝えておかなきゃと思っ…」

あと今日はそのミスで色々と忙しくて、帰れないかもしれない。」

「…わかった…」

「ごめん。」

ピツと切れる通話。朝、あんなにウキウキしていたのに…。

あの人がミスをするなんて、今までで初めての事じゃないかな…？仕事の事を全て、私に話しているかは分からないけれど…でも珍しい事だとは思った。

「…準備しちゃったご飯、どうしよう…」

下準備を終えてしまった食材を見て小さくため息をついた。

「今日、帰れないかもって言ってたし、今日作ってもしょうがないよね。」

冷凍できそうな物は冷凍して、祐也の気持ちたちが落ち着いてから作ろうかな。

冷蔵のモノは明日にでも…。

「…はあ…」

祐也、大丈夫かな。きっと相当落ち込んでるよね。私にもできる事があればいいのに…

主婦って…無力だな…。

小さくため息をつく事しか出来なかった。

そうして十分が過ぎた時、もう一度私のスマホに着信が来た。

祐也かなと思いつながら画面を確認すると、見知らぬ番号が表示されていた。

「……？」

誰だろう……そう思いつながらも、一応通話ボタンを押した。

心のどこかに祐也に何かあったんじゃないかって心配もあつて、電話に出てしまったのかもしれない。

「……はい？」

「……もしもし。高木祐也さんの奥様ですか？」

低く重厚感のある男性の声……

「そう……ですが……」

「祐也さんの上司の黒崎と申します。突然のお電話申し訳ございません。」

緊急でしたので、緊急連絡先として登録されていた奥様にお電話したので……

黒崎さんって祐也が少し怖いって言っていた人……だよ……

「お世話に……なっております……。あの、主人に何か……」

「……昇進の話が保留になった件は、もう聞かれましたか？」

「え、ええ……。主人から電話がきて……ミスをしたと……」

「……ミス、なんて軽いものではないですがね。」

「え……？」

「正直に申し上げますと、今、祐也さんの解雇の話も出ていて」

「解雇……？」

「……ええ。」

「そんな……」

「ただ僕がこうして奥様にご連絡したのは、僕ならどうにか出来るからです。」

「どうか……とは……？」

「……詳しい話は今夜、直接しましょうか。電話でするような話ではないので。」

今夜九時、会社近くのシティーホテルで待っていますよ。

もちろんご主人には何も告げずに来てくださいね。」

断る隙を与えないように次々に言葉を吐き捨てられる……。

「ちよ、ちよっと待ってください……」

「何か？」

「主人には言わずにホテルなんて……」

「……もしかしたら解雇の話がなくなるかもしれない、ってご主人に伝えるつもりですか？どう
いう風に話が転ぶかも、まだ分からないのに。」

そんな風に期待させるような事を言って、もし解雇が決定したらどうなさるおつもりですか？」
冷静に淡々と告げられる言葉……声から感情を読み取る事ができない。

もし…私が黒崎さんと話をして、祐也を助けられるのだとしたら…行かない選択肢はなかった。幸い、今日は祐也が帰ってこないかもしれないし、バレル可能性は限りなく低いはずだし…。

「…わかりました…。今夜、お伺いします…」

覚悟を決め、承諾の返事をする、電話の向こうからくすつと笑う声が聞こえた。

「……？」

「聡明な奥様なら、そう決断するだろうと思っていましたよ。では、また後ほど。」

（中略）

「…健気ですね。」

「…え…？」

「さっきイきたいって僕に縋ったくせに。」

「っ、それは…」

「ご主人の為に僕に従っている…なんて建前で自分を守るのは、気持ちいいですか？」

「っ…」

心の防波堤を抉ってくるような、見透かした言葉。

「…主人の…為です。それだけは…間違いない…から…」

必死に紡ぐ言葉に、黒崎さんはくすつと笑って、私の中から指を抜いた。

「へえ。その覚悟がどこまでのものか、見せてもらいましょうか。」

黒崎さんはそう言うと言つとスツとベッドから立ち上がり、鞆から何かを取り出した。

「…？」

次は何をされるのか、恐怖と期待でぞわぞわとする感覚が身体に走った。

（中略）

指定されたお店の前までやってくると、祐也が私を見つけて駆け寄つて来た。

「奈々！」

「あ、祐也…」

「昨日は色々と心配かけてごめんね。黒崎さんが助けてくれてさ…。失礼のないようにだけお願いね…！」

小さな声でそう耳打ちされる。

黒崎さんが動いたのは私が対価を払ったからなのに…。ただそれを公にはできない。

「…分かった。」

小さく頷いて、沢山の不満を飲み込んだ。

祐也に引つ張られて黒崎さんの目の前に連れて行かれる。黒崎さんの冷たい目が私を捉え、フツと軽く笑っているのが見えた。飲み込まれないように目をそらすことしか出来なかった。

「奈々、こちら黒崎さん！俺の恩人なんだ！」

夫が私に挨拶のタイミングを与えるように言葉を紡ぐ。

「初めまして、奈々さん。」

黒崎さんがニコッとわざとらしい笑顔を顔に貼り付け、挨拶をしてくる。

「……初めまして……いつも主人が……お世話になっております……」

少し言葉に詰まりながら、定型文を口にし、軽く頭を下げる。

「……綺麗な奥さんだね。」

黒崎さんが祐也にそう言っていると、祐也は照れたように笑った。

「あはは、ありがとうございます！本当に優しい妻で……」

「……うん。確かに優しいそうだ。祐也君の為ならどんな事でもしそうだね。」

意味深な言葉をぶつけてくる。何も気付いていない祐也は、照れたように笑い続けた。

「……」

余計な事は言わないで、と訴えるように黒崎さんを睨んだ。だけど黒崎さんは祐也には分からないようにスマホをポンポンとタッチした。

まるで昨日の録音、忘れてないよねと脅すように。

（中略）

「……じれったいですね。ほら、こうやって手をつくんですよ。」

手首を強引に握られ、ドアへと押し付けられる。

「お尻を突き出して。」

荒々しい言葉…。

「…祐也くんにはバレないといいですね」

そう言いながら、ぐちゅつと後ろから彼のモノが入ってくる。

「ああああ…っ」

「しー。扉の向こうに祐也くんがいるんだから、静かにしてください。」

そう言いながら奥を突き上げられる。

「う…あ…あああ…」

声を出してはいけない、祐也にはバレたくない、今までの日常を…守りたい…。

必死で声を我慢するのに…口からは勝手に震えた声が漏れてしまう。

あなた…起きないで。今は眠りの世界で、何も…聞かないで…。

「…っ、はあ…よく締まりますね…。」

「…あ…ん…ん…奥、や…そこ…おっ、あ……」

「…ココですね。」

ずんと奥を強く突き上げられ…脳までもが揺さぶられるような感覚。

「い…あ…あ…~~~~~♡♡♡」

強制的に絶頂へと落とされる。いきそうなんて感覚もないくらい、勝手に堕ちていく…。

ガクガクと激しく痙攣する私の身体。突っ張った両手が、寝室のドアをトントんと小さく揺ら

してしまふ。

その微かな振動すら、寢室の祐也に届いてしまうのではないかと恐怖しながら、私の最奥はドクドクと不甲斐なく黒崎さんのモノを締め付け、淫らな液を溢れさせ続けた。

「う…ああ…ああ…っ」

声が震えて止まらない、身体の痙攣も止まらない…。意識が朦朧とする…。

「奥…ついて…ああっ…ああ…」

理性はもう剥がれ落ちて、どこかに置き去りにしてきたみたい。

「…：奈々さんが望むなら。」

突き上げられる度に、綺麗な思い出がぐちゃぐちゃに滲んでいく。清楚だった日常が、淫らに塗り替えられてしまふ。

この場所で…祐也とキスをした事があったな。まだ新婚だった頃…。触れるだけのキスをするだけで顔が真っ赤になったんだっけ。

あの頃の私は…もういない。

「えっ、あ…」

また堕ちちゃう…そう思った瞬間、寢室からガタツと音が聞こえた。

（全容は製品版にて）